

第1部 映画『槌音』上映&監督トークショー

映画監督 **大久保 愉伊**

(映画上映終了)

【横田】

皆さん、こんにちは。今、皆さんと一緒に映画『槌音』を見させていただきました。いろいろな意味で感動が伝わってくる場所があったと思います。この映画を鑑賞するだけで十分だという感じもありますが、せっかく監督の大久保さんがこの会場に来ておられますので、この映画をつくる意図や背景などについて、いくつか質問させていただいて、お話を伺いたいと思います。

最初に、この映画をつくろうと思った動機というのはどういうところにあったのでしょうか。

【大久保】

最初のテロップ（映画中に表示される文字）にも出てきたのですが、私は、東日本大震災から2週間たってようやく故郷の岩手県大槌町に帰ることができました。この時は、家族の支援物資を優先して夜行バスに乗り込んだので、映画用のカメラは持ち込むことはできませんでした。もし何か撮影することがあれば、スマートフォンで撮ればいいなという気持ちだったのです。大槌町には、南隣に位置している釜石市から北上して向かったのですが、釜石市の被災状況を見て、自然とスマートフォンの録画ボタンのスイッチを入れて撮影を始めたのです。



大久保 愉伊さん

故郷には5日間滞在して、撮影をしてきたのですが、東京に戻ってくると、夢心地と言いますか、本当にこれが自分の故郷の姿なのだろうか、事実を受け止めることができない気持ちしがばらく続き、これは何とかしなければいけないなと思いました。僕は、映画制作を志して故郷を出た人間ですので、故郷にいたときの記録映像を上京するときに一緒に持ち出していました。それを片っ端から見て、震災後に撮影した映像も見て、これを絡めてつくることで、自分自身が今起きていることと向き合うきっかけになるのではないかとというのが映画をつくる動機となりました。

【横田】

映画の中では、故郷の破壊された後と破壊前の生活が二重写しになっていたわけですが、震災前の映像の中で、お祭りの映像が割合多く出てくるのですが、この映像が大久保さんにとって、故郷を思うときにまず頭に浮かんでくる映像だと見てもよろしいのでしょうか。

【大久保】

そうですね。大槌町は、ふだんは過疎化が進み、閑散とした本当に静かな町だったのですが、僕も含め祭り好きが多く、年に一度のお祭りのときにはすごく賑やかになりました。震災前に帰ったのが、2011年9月の大槌祭りだったので、最後に見た故郷の祭りの姿という記憶が、この映画をつくったときに自然と出てきたのだと思います。

【横田】

なるほど。お祭りというのは日本人の心のふるさとでもありますから、場所は大槌町でなくても、私たちにはそのような思い出はそれぞれあるわけですが、大槌町は、津波、地震で家など日常的にあったものがみんな壊れましたよね。ふだん何ともなく思っている踏切のチンチンという音までもがなくなったわけです。その中で、お祭りを映像として映したことは、町並み、道路、電車などはただ物としてあるのではなくて、人々の営みの一部として、お祭りという形となって存在している、ああいう楽しい生活があったという記憶として。それがつまり、震災によって物が壊れたことよりも、生活が

壊れたことを映し出しているように私は見たのですが、そのような意図があったのでしょうか。

【大久保】

これは映画をつくっている人間として不適切な言い方かもしれないのですが、ふだん僕が映画をつくる場合であれば、被写体とカメラの距離であるとか、これをどう切り取ろう、映像としてどう構築していこうかと考えながらつくっていくわけですが、この『槌音』に関しては、目に見えているものと、映像を撮っている私はうまく対峙できていない、向き合えていないのです。なおかつ、映像を編集しているときも本当に個人的な気持ちの整理のためだったので、横田先生の御考察ほど意識はしていなかったと思います。

【横田】

逆に言うと、私たちにとっては、その辺りが語らずしてこの映画の魅力になっている気がするのです。私たちは、津波で壊された映像というのは、ある意味で見過ぎるほどたくさん見ているわけですが、この映画はどちらかというと観察的に映像を撮られている。先ほど、御家族への物資を優先したため、映画撮影用のカメラは持っていかず、スマートフォンで撮影されたと言っておられましたが、当然、専門のカメラマンが撮ったほうが映像はくっきりしていただいでしょうし、場面としてもいい場面を撮ったと思うのです。ですが、当事者が見ている風景をそのまま撮影したことで、この映画を観ている私たちも、何となく被災地にいるような気がしましたし、この破壊は当事者の目にはこのように映っているのですよ、というメッセージを受け取ったような気がするのです。監督として、この映画をつくるときにそれは頭の隅にあったものなののでしょうか。

【大久保】

この映画が完成して、1年と少し上映をしてきている中で、つくっている人間として、自分はどういう立ち位置なのかということを考えてみました。僕は、3月11日の震災時、故郷にはいませんでした。一方、僕の家族は実際に津波を見ていまして、逃げるのが5分遅ければ死んでいた状況でした。ですので、家族や大槌町民と、町を出た人間の僕は、立場が少し違うのです。僕も、明らかに当事者ではあるのですが、どちらかという望郷や郷愁といったものが感じられるものになっているのではないかなと完成してから思いました。

【横田】

そういう御自身の立ち位置も考えながらつくられたということからすると、これをどういう人に、どういう形で見てもらおうという気持ちがあったのか、その辺を御説明していただけますか。

【大久保】

もともとこれを誰かに見せようというのは全くありませんでした。これは短い作品ですので、宮城県石巻市の震災に関するドキュメンタリー映画の監督をされている森元修一監督の『大津波のあとに』という映画と2本立てで、去年上映活動をさせていただきましたが、上映活動を行うきっかけは、森元さんに声を掛けていただいたことでした。ですので、森元さんに上映する機会をつくっていただいたという形でして、どういう人に見ていただきたいというのはつくっている当初は特にありませんでした。しかし、よく、なぜ『槌音』というタイトルをつけたのですかと聞かれます。復興に向かっていく町を切望している気持ちもあるのですが、私の記憶している大槌町の音を、もう一度スクリーンで発したいという気持ちからつけました。震災直後の大槌町で響いていた音というのは、カモメの鳴き声、風が強く吹きつける音、そして遺体捜索やがれき撤去の重機の音ばかりでした。ですが、ここも以前はこういう祭りの音が響いていたんだよ、こういう生活の音があったんだよというものを一つ表現したく、それが伝わってほしいなという思いはありました。

【横田】

その点は後で質問しようと思っていたことなのですが、それは私も思いました。

私も震災から半年経って、宮城県の南三陸町や釜石市（岩手県）辺りを少し取材する機会を持ったのですが、夜になると音が全くしなくなるのです。虫の声さえ聞こえなくなります。ある意味で、ふだん経験しない音のない世界を感じたのですが、カモメの声は聞こえましたね。この映画と同じで。私はこの映画を観たとき、音のない世界、カモメの声しか聞こえてこない世界がきちんと表現されていたことが非常に印象的でした。

やはり、カモメの鳴き声を入れるというのは、印象的なものとして意図の中に入っていたのでしょうか。

【大久保】

そうですね。劇中では、雪の中でカモメが二羽、空遠くに去っていく姿に祭りの音が被さっているのですが、まだ見つかっていない方々も多い時期でしたので、ここでたくさんの方が亡くなっているという、目の前の死というものと直面したときに、カモメの鳴き声もそうですし、飛んでいる姿というものが、イメージとして亡くなった、又は今も見つかっていない方々に重ね合わさってはいました。

【横田】

あえて御自身の声を入れずに文字で読ませたというところは、何か意図があったと思われるのですが、その辺はどうでしょうか。

【大久保】

僕自身が自分の気持ちを込めてナレーションを行ってもよかったのかもしれないのですが、つくった当初は、本当に淡々とした感じにしたかったと言いますか、見たまま、感じたままをそのまま伝えたかったので、このような手法にしました。

【横田】

私が実際に被災地へ行って見たこと、そして今日、大久保さんがつくった作品からも感じられたことは、自然と人間の生活と、それから人間がつくった文化と言いますか、お祭りも同じですが、鉄道や、学校、建物などの人工物の、この三者が調和しているときには、私たちは幸せな楽しい生活を送っているのです。その中で、自然の脅威が生活のほとんどを破壊する。ただしかし、槌の音という表題で表現しようと思っているのは、その中でも人々というのはまた、再建の槌音を大槌町に響かせつつある、そんなところにこの映画の大災害の側面と、しかし将来に明るい兆しをちょっと見せようとする、そんな意図を感じたのですが、その辺はどのように大久保さんは捉えておられるのでしょうか。自然と人間の生活と人間がつくったものとの関係ですね。

【大久保】

それに関して言えば、僕は引き続き大槌町の記録映画をつくっていきまして、まさにテーマの一つがそのことなのです。大槌町は、またいつか大地震が発生し、津波が来てしまう津波常習地ですから、この町はこの環境と向き合って生きていかなければいけません。今まではどこか向き合っていなかった部分が確かにありまして、今回のような結果になってしまったという一面はあるとは思いますが。

ですが、山があって、川が流れていて、目の前に海が広がっているという、この大槌町の環境は変わらないわけですから、その自然とどう共存していくのか。あとは、僕がたかだか知っている大槌町の記憶というのは二十数年だけなのですが、今回の震災で真っさらになくなってしまったことで、前々回の震災が起こる前は、どういう町だったのだろうか、どういう生活が行われていたのだろうか、先人たちの歩みや歴史と知りたいと考えるようになりました。ですので、それを次回作でアプローチしています。

【横田】

その自然との営み、自然との付き合い方ということも、また教訓として学ばれたということをおっしゃったのですが、あの映像の中に、冬の雪かきをしている場面がありましたね。雪国の雪かきって大変ですよ、それも、自然との付き合いの一つですよ。あれは何か象徴的な意図があったのですか。

【大久保】

大槌町は太平洋沿岸地域ですので、秋田や山形に比べると、そこまで雪は降りません。あの場面はたまたま大雪が降っていたときに撮った映像でして、自然との付き合い方を表現したいと意図ではありません。

【横田】

分かりました。今ちょうどお話が出ましたが、この映画の続編をつくられておられるということで、その予告編のようなものを少し見せていただくと伺ったのですが、このあと続けて見せていただくということでよろしいでしょうか。

【大久保】

はい。

【横田】

それでは、これでトークショーは終わらせていただきますが、この後、次回作の予告編を御一緒に見させていただくことにします。

大久保さん、どうもお忙しいところ、今日はありがとうございました。

【大久保】

どうもありがとうございました。(拍手)

(次回作 映画予告編上映 省略)



会場風景